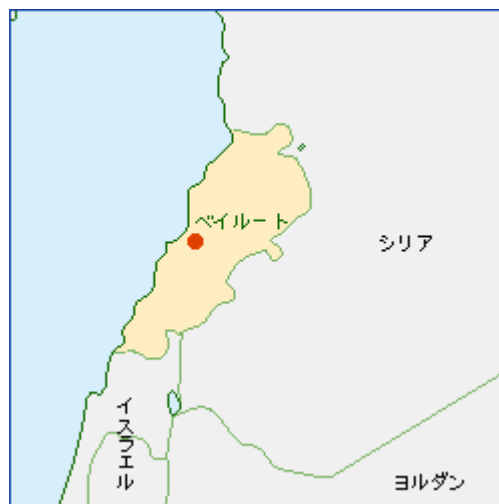


【ベイルート】という響きを懐かしむ商社マンOBは多い。

もちろん私の世代には既に内戦に突入していた後なので、単なる“危ない国”というイメージが強いのだが、かつては『中東のパリ』として栄えた街である。

一番多いときで日本人は3000人近くいたというから、ヨーロッパの小さい国の首都を凌ぐ人数である。



しかし、7割を締めるイスラム教徒と3割を占めるキリスト教徒が1975年に衝突し、報復に次ぐ報復を繰り返す。そこへイスラエルとシリアとイスラエルが軍事介入

したものだから、内戦は泥沼化し、血で血を洗う戦いを15年にも渡って繰り返ひろげられ、街は完全に荒廃してしまう。

特にイスラエルの『ベイルート侵攻』は、新聞の見出しによく出ていたのを今でも思い出す。

1989年にようやく和平合意が成立。国土は復興、治安も急速に健全化し、現在は全くの平和な時が流れている。

レバノンの概要。

- 1.面積 : 10,452km² (岐阜県程度)
- 2.人口 : 400.5万人 (97年中央統計局)
- 3.首都 : ベイルート
- 4.人種 : アラブ人
- 5.言語 : アラビア語 (仏語及び英語が通用)
- 6.宗教 : キリスト教 (マロン派、ギリシャ正教、ギリシャ・カトリック、ローマ・カトリック、アルメニア正教)、イスラム教 (シーア派、スンニ派、ドルーズ派) 等 18 宗教
- 7.略史 : 16世紀 オスマン・トルコの支配下に入る
 - 1920年 仏の委託統治領となる
 - 1943年 仏より独立
 - 1975年 レバノン内戦始まる
 - 1978年 イスラエルのレバノン侵攻
 - 1989年 ターイフ合意 (国民和解憲章) 成立
 - 1991年 内戦終結
 - 2000年 イスラエル軍南レバノンから撤退



上記のレバノンの面積だが、岐阜県とほぼ同じ、と外務省もガイドブックも言っているが、岐阜県の人にはピンときても、それ以外の県の人には分からないと思う。ちょっとセンスがないかも。ごくごく簡単に言えば、川崎市の72.5倍である。因みに人口は3.1倍、イケ面の倍率は0.02倍、ぼったくりの確率は10万倍程度である(やられたぜ)。

レバノンの国旗には木が描かれている。これはレバノン杉で、かつてはレバノン全体を覆っていたらしい。フェニキア人の時代(紀元前 12 世紀)の頃から外洋船や建築資材として使われていたという記録が残っている。その後数千年かけて、森は乱伐され、現在はレバノン北部にたった 1200 本しか残っていないらしい。

一応世界遺産になっているらしいが、緑を見慣れた日本人が行くと『たったこれだけ?』という風に思うらしい。

因みに花粉症の私は恐くて行けない。

レバノンはシリアとイスラエル、そして地中海に囲まれた土地である。イスラエルへの道は閉ざされているので、シリアに戻るか、地中海の島、マルタへ船で行くかしか出口がない。

シリアに戻る場合、再びビザが必要である。トルコのアンカラで取ったように、日本大使館に行きレターをもらい、シリア大使館に行くのか、と思ったが、レバノン シリア間だけは、特別に国境でビザが取れるらしい。これも、シリアがレバノンを国と認めていないからかもしれない。

一方、シリア レバノンのビザは国境で取れる。48 時間以内の滞在なら無料らしい。

ベイルートへ

シリアのダマスカスからベイルート行きのバスは 3~4 時間の行程ながら、200 シリアポンド(431 円)だという。シリア国内の 4 倍。とても高いが、レバノンという国は物価が高いと聞いていた。そのせいかもしれない。

バスは乾燥した大地を突っ走る。こんなところにもレバノン杉が生えていたのか?と思うような砂漠に似た景色が続く。両国間にはきれいなアスファルトの道路が引かれていて、乗合のバンは、下り坂だと 150 キロぐらいで飛ばす。

交通事故も少なくないから、一番前には座りたくないのだけれど、シリア人ドライバーはいつも人が良く、『おおっ日本人か、じゃあ俺の隣に座れ』と特等席を用意してくれてしまうものだから恐くてしょうがない。



乾燥した大地に、きれいにひかれていたアスファルト道路。車線は書いてないが、3 車線分くらいはあってぶっ飛ばせる。

シリアとレバノンの間には、アンチレバノン山脈というのがある。その端っこの端っこを通るのだが、そのルートでさえもかなりの山越えがある。登ったり降りたり、なかなかたいへん。自転車でなくて良かった。

シリア出国後、レバノン入国。48 時間のトランジットビザは無料だけど 15 日のやつは 25,000 レバノンポンド(1833 円)。レバノンって国は面白くて、以前日本人を対象に 1 ヶ月間無料ビザキャンペーンをやっていた事があるらしい。残念ながらもう終わってしまったみたいだ。48 時間だとバタバタしてしまうかもしれないが、内戦の後のベイルートだけを見たいので無料の方にした(これは失敗だった)。

ベイルートまでは、もう1つ山越えがある。
運転手が何故か途中で3度も休憩を取る。よく分からないけど、観光地でよくある、お土産屋さんへの客の斡旋商法みたいな感じ。

そんな店でふと見ると、レバノン側の店にはコカコーラが置いてあった。

シリアにも、【スポーツコーラ】と名づけられたものがある。一見コカコーラにそっくり。味は少しまずいくらい。ここもそうかと思ったらちゃんとしたコカコーラだった。飲むのはキリスト教徒かな。

因みにシリアではペプシは平然と置いてあるから

不思議だ。そしてコカコーラがない分、カナダドライの製品がたくさん出回っていたりする。



シリア~レバノン国境に近い、レバノン側の店。久々に見たコカコーラが詰まれている。

レバノンの物価

タスターミナルから程近いところに Talal's というホテルがある。ベイルートへ来る旅行者はほとんどがここに来るといふ噂だった。物価の高いレバノンにあって、ドミトリーが6ドルらしい。ここ以外のホテルではいきなり値段がアップしてしまう。

実際に行ってみると、いやー実に快適だった。

まず宿でビールが買える。1本500ミリリットルのやつが1500レバノンポンド(110円)。シリアのパルミラで飲んだ銘柄と同じだ。シリアでは1本151円だったからとても安い。

そしてインターネット完備そして何と無料、日本語の打ち込みもOK。

部屋には冷蔵庫、衛星テレビ、空調が完備。この日はダンス・ウイズ・ウルブズをやっていた。

そしてここは台所が使えるのだった。

こういう宿はなかなかない。ビザの都合で2泊しかできないのが残念。

台所が使えるので早速夕飯の調達。

スーパーマーケットは自転車で10分くらいのところにあった。結構大きな店だ。何でもある。ヤマサ醤油(5ドル強)にサッポロビール(1ドル強)。レバノンはシリアに比べて物価が圧倒的に高いと言われる。夕食なんかも直ぐに1000円ぐらいいってしまう。でもやはり素材は安いみたい。

・レバノンのビール 500ml	1015	レバノンポンド	75	円
・水 2リットル	550		40	円
・赤ワイン 750ml	4500		330	円
・玉ねぎ 1個	98		7	円
・ねぎ 1本	390		29	円
・マッシュルーム 7個	525		39	円
・卵 6個	1050		77	円
・牛肉ミンチ 300g	1199		88	円

という感じ。さすがにシリアより高いが、トルコよりも物価は安いと思う。

ベイルートの街

自転車でベイルートの街を散策。相変わらず車の多く、車優先の街でとても走りにくいが、海岸線はたっぷり遊歩道がとってあって気持ちがいい。

ふと、キューバのハバナの海岸線を思い出す。
雰囲気は全く同じなのだった。

- ・とても新しいビルがある一方でとても古くて崩れそうなビルがある。
- ・そして高層ビルの建設ラッシュ。
- ・ぽっかり空いた敷地。
- ・こんなのあり、という程のぼろぼろの車も走ってれば、高級車も走っている。
- ・鳴り響くクラクション。
- ・遠くから聞こえるサイレン。
- ・遊歩道ではのんびり散歩している人がいるし、釣りをしている人もいる。
- ・その横で風に揺られる椰子の木。
- ・どこからともなく煙草の臭い(キューバは葉巻だけ)。
- ・まだ強い日差しと海の色、遠くの客船。海沿いから続く丘。

開発中の海岸線なんてこんなものかもしれないが、何だかキューバに舞い戻ったような気がして不思議だった。



ベイルートの海岸沿い。この景色、キューバのハバナの海岸沿いにそっくりで驚いた。

豊かな大地に温暖な地中海の気候を持つレバノンは、過去には『中東のスイス』と呼ばれたそうだ(あれっ、パリじゃないのか)。

しかしやはり自分の記憶にあるレバノン、そして【ベイルート】イコール内戦、そして危ない街、というものである。

1975年から始まったキリスト教対イスラム教の内戦では、誘拐も相次ぎ、無政府状態になったという。

マスコミの特徴として、事件があったら真っ先に報道するが、その後のフォローはほとんど無し、というのが相場だが、レバノンがその後どうなったのか、不勉強も手伝って私は全く知らなかった。

1989年に和平に合意。国家の復興に向けて懸命な努力が続けられているそう。



復興が進むベイルートの街。至る所でクレーン、ダンプが活躍している。

街を散策すると、日本のゼネコンがうらやむほど建設中のビルが目立つ。完成予定図にはピカピカの近代的な高層ビルが描かれている。しかしその横には、弾痕が痛々しいほど、むちゃくちゃに穴が空いた放置されたビルがあるというのも驚いてしまう。

経済面では、かつての中東における金融センターという地位を復活させるべく力を入れているそうである(因みに、バイルートが無茶苦茶になって、中東の金融センターとして、現在ではバーレーンがなかなか栄えているらしい)。



内戦で穴だらけになったビル。高層だけに簡単に壊したり修復できないせいか未だに残っている。

確かにここバイルートでは、ATM が街の至る所にある。その ATM からは、レバノンポンドだけでなく、何とドルが下ろせるので旅行者にとってはとても便利な存在である。各国のビザ代は、大体がドル払い、しかもお釣は出さないよ、というところが多いからだ。

最初はシリアと同じようなものかと思っていたが、何だかとても近代的な街だった。

マックあり、ピザハットあり、ハードロックカフェあり、ケンタあり。

ガソリンスタンドは BP だし、タイヤ屋さんは Good Year だったりする。

走る車はベンツやパジェロ。ポルシャもあったりする。

掲げている看板も、アラビア語の方が圧倒的に少ないのだった。

イスラム教徒 70%、キリスト教徒 30%という、高いキリスト教徒の割合が、ヨーロッパからの

投資を呼び込んでいると聞いた。確かにこれから発展するぞ、という雰囲気街を包んでいる気がした。



ハードロックカフェとマクドナルド。走る車は新しいベンツだったりする。アラブっぽくない国だ。

今日は金曜日なのでお祈り&お説教の日。多くのモスクに人が来るのは良いが、2重駐車(所によっては3重駐車)している。信仰深いのは良いが、公共の精神も持った方が良いんじゃないかなあ。この辺がやっぱりシリアと変わらないアラブ人なんだな。

正統派アラブ料理

これまでギリシャではピータ、トルコではケバブ、シリアではシュワルマと呼ばれるものばかり食べてきた。いずれも街でよく見かける、串に巻き付けた大きな肉の固まりがぐるぐる回っているやつである。

これをパンに挟む。一番安い部類のファーストフードだ。最初は美味いんだけど、だんだんと飽きてくる。

そんな時に“世界で言われているアラブ料理というのは、レバノン料理がルーツになっている。レバノン料理こそが、正統派アラブ料理である”なんて話を聞くと、かなり気になる。おまけに、テーブルに並びきれないほど出してくれる前菜、これをメZZァ(Mezze)というらしいが、それも気になる。何だか韓国のキムチ定食みたいだ。

そんな訳で、ベイルート(Beirut)の街を自転車で走りまわり、一番高級そうな店へ行ってみる。さすがにTシャツ短パンサンダル、おまけに自転車で汗だく、という姿では入れてくれそうもないなあと思ったが、まずは守衛さんと記念撮影などして仲良しになり、中へ入れてもらうことに成功。

メニューはアラビア語とフランス語の物があったけど、当然分からない。でもコース料理ってのがあって、メZZァらしきものがずらりと並んでいる。

従業員もフランス語は分かるみたいだけど、英語は駄目。

おまけに、メZZァを目的に来る人間などあまりいないらしくてなかなか通じないが、多分間違いないだろうということでコース料理を注文した。

値段は38,000レバノンポンド(2,787円)。普段の10食分(以上)。

さすがに躊躇したが、ビールのみ放題と聞いてあっさり注文した(そういう会話は簡単に通じるんだな、何故か)。

冷たいメZZァが6品、温かいメZZァが4品出てきた。よくもまあ、これだけ野菜や豆を工夫して調理するもんだと実に感心。

味はやっぱりアラブ風。日本人にあう物もあればまずい物もある。

値段も十倍だが、量の方もすごい。この1皿のおかずとパンで、いつもなら済ませちゃうようなボリューム。それが10皿もならんでテーブルはすごいことになっている。

食べている途中何回も焼き立てのパンを配ってくる。まだあるっちゃうの。



奮発して入ったアラブ高給料理店。メZZァと呼ばれる前菜が10品も並んで感激。

結局、前菜は5分の1も食べられなかった。5人くらいで来たかったよ。

メイン料理は肉三昧。羊肉のミンチに玉ねぎ、パセリを混ぜて串に刺して焼いたもの。同じく鶏肉にスパイスを掛けて焼いたもの。さらに牛肉を串刺しにしたもの、ガドカンと出てきた。そこら辺のお店で食べるよりさすがにジューシー。アラブ料理、なかなかやるな。

さすがにこの日ばかりは、ビール4本は飲みすぎた。もっと食べたのに、と反省。

加えて・・・、デザートフルーツがすごかった。10種類ぐらいのフルーツが、巨大な容器に乗せられて登場。中には柿まであった。さすが正統派アラブ料理、侮れないぜ。

再びシリアへ

がっつり飲んで、がっつり食べたせいか、宿に戻って曝睡となった。

翌日起きたのは何と9時。慌ててバスターミナルへ急ぐ。バスターミナルでは、小型のバンが待っていた。ところが普通運賃5ドルのところを、『自転車と荷物があるから』と20ドルと吹っかけてくる。あんまりだ。

宿の親父も5ドルもしくは7000レバノンポンドと言っていたので、9000レバノンポンドで妥協しようとしたが、『ふんっ』と一向に相手にもされない。レバノン人、意外と冷たい。完全にすれた人種となっている。

そのうち、無情にもそのバンが発車。あぁ～あ、と思っていると、10メートル進んで停まった。場所を変えてこちらの焦りを待っているのか？ それとも満席になるで待っているのか？

実は私には弱みがあった。48時間のレバノンのビザである。その期限があと3時間で切れてしまうのだった。

腹が立つが、侃侃諤諤の交渉結果13ドルという、あまりにぼったくられて妥結した。慌てていると駄目だな。自転車を持っているがゆえの損失は8ドル。

実はベイルートで、100ドルで自転車を売ってくれ、という人がいた。故障だらけの自転車を、あげるならまだしも、100ドルで売るなど非人道的、と断ってしまっていたのだった。

相手は日本製だと思っている。トヨタかソニーだと思っている。そんな人に売る訳には行かない。いやー実に紳士である。

しかしバスターミナルのレバノン人、人の弱みに付け込みやがって、売るときゃよかったよ。キャノン製として110ドルで。

ヨルダンへ

ぼったくり乗合バスは、3時間でダマスカスに着いた。

でもシリアにはもう用がない。1日に2本しかないヨルダン/アンマン行きの直行バスに乗ろうとすると、自転車は駄目だと言う。

自転車受難の日。レバノンで売るときゃよかった。

さて困った。取りあえずシリア～ヨルダン国境まで行くか、と思いき乗合バス乗り場へ行くと、ちょうど国境へバスが出ると言う。

ジョーダンボーダーの一言で乗ってしまった。1ドルというバスの運賃も気に入った。1時間強で着いたのはダラと言う街。ガイドブックにぎりぎり載っている小さな街。

ここで降りるが、国境の先のラムザと言う街まではさらに 20 キロあると言う。

既に 5 時近い。何だか良く分からないが、もう一人自転車を持って来ているアラブ人もヨルダンに行きたいらしい。

タクシーの運ちゃんは一入 1000 シリアポンド(1078 円)と吹っかけてくる。シリア人初のぼったくり野郎だ。

今日は、そんな日なのかもしれない。負けてもらって 800 シリアポンド(863 円)。

ところがなかなか発車しない。もう一人のヨルダン人が妥協しないみたいだ。はよせんとアンマンまで行けないよ、促すと揉めたまま発車。途中でも何か交渉(というか喧嘩)しているようだった

運ちゃんは途中でオクラを山ほど買った。30 キロほど。これをヨルダンに運ぶらしい。オクラは 1 キロで 1 ドルとのこと。食べてみると言われ食べてみた。結構美味しい。日本だったら私も買ったに違いない。



積まれたオクラオクラオクラ。こっちのオクラは 1~2 センチ程度の短いやつ。味は濃厚でもちろんねっとり。

タクシーは国境へ。

ヨルダンのビザ代は無料。ラッキー。

ヨルダンの係官はすべて、ジャバーニと知ると、ウエルカムと歓迎してくれる。いい国の予感。

ラムザという街に着いた。

ATM はどこにあるのかを地元の人に聞いている間、乗ってきたタクシーが客を乗せてどこかへ行ってしまった。待てども待てども帰ってこない。

お金を下ろした後も、待ってみたが戻ってこない。あ~あ、お金まだ払ってないのに。

ぼったくり受難の日は、最後の最後でタクシーの運ちゃんに移ったみたい。ラッキー。

でも、自転車受難の日は続く。

このラムザからアンマンまでバスが出ていると聞いていたが、自転車はやはり無理だと言う。20 キロ離れたイルビットまで行けば大型バスがあると言うのでまたもやバンのタクシーに乗って移動。運ちゃんが全然妥協しないので、2.5 ヨルダンディナール(388 円)で妥結。ヨルダンは少しシリアとは違って金にうるさい国民のようだった。同じ顔、同じ言葉をしゃべっているのに違うもんだ。

そんなこんなでイルビットに到着、ヨルダン行きのバスに乗り換えようやくアンマンに着いたのは、もう夜遅かった。

つづく